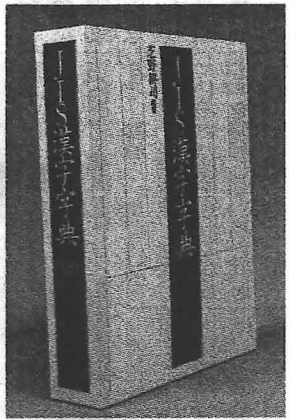


# マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

## 緑の会議室

「JIS漢字字典」は、パソコンやワープロで文書を作るために日本工業規格が定めた漢字コードの字典。「漢和辞典」と異なり、地名・人名に由来する国字を取り入れるなど、現実で使用されている日本語をベースにすることが最大の特徴です。「緑の会議室」では、インターネット時代に重要度を増している漢字の国際化問題も議論されました。(日本規格協会、特別定価4300円)



こはやし・ぎょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン 衰亡史」。はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

## JIS漢字字典

芝野 耕司編著

広瀬 √コンピュータやワープロで文章を書いたり、こうやってインターネットで文字を交換しているときに必ずお世話になるJIS漢字コード。この字典は、この規格の第四次改定を行ったメンバーを中心に、JIS漢字とは何かを、徹底した調査によって明らかにした字典です。それは、漢籍を読むための「漢和辞典」とは異なり、現代日本で使われている漢字の相当部分を網羅した「現代日本語漢字字典」となっています。

広瀬 √「現実に使われている文字だからこれを文字として同定する」という立場ですが、

小林 √その哲学というか気が負いが如実に現れているのが序

## 用例を徹底網羅し 国際流通に向け第一歩

小林 √漢和辞典的な教養主義とはまったく切れた、「日本人の(日本人だけ)のための、日本人による字典」ですね。

橋爪 √瓜という字があります。この字典には「つめ」と

橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則

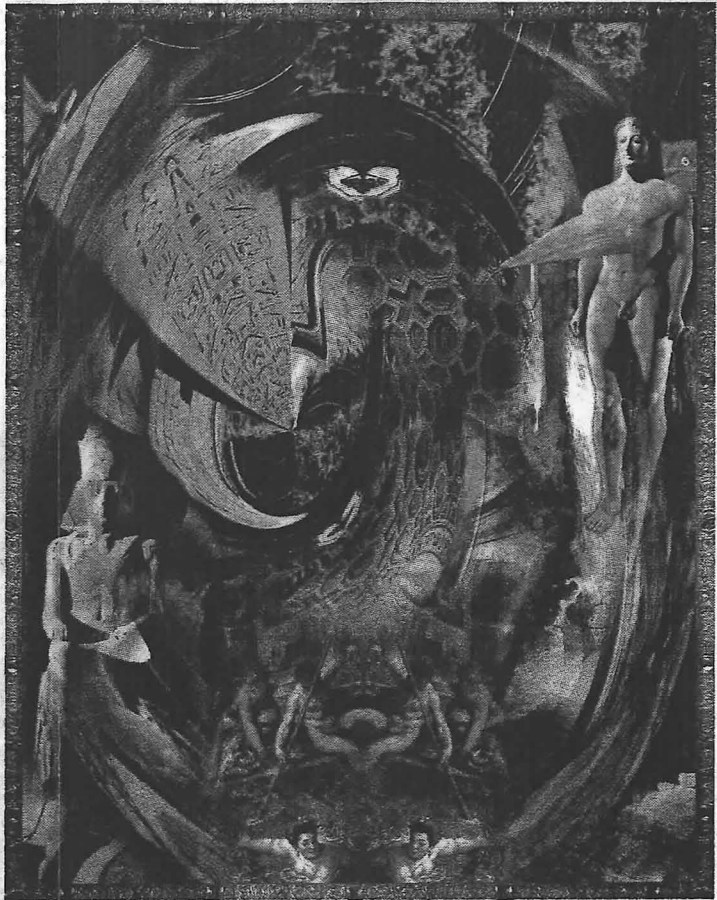
橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則

橋爪 √瓜という字があります。この字典には「つめ」と

橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則

橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則

橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則



CGアート・横尾忠則

新年早々、SF作家の草分けである星新一さんの訃報が飛び込んできました。

「仕事始めの日に星新一さん死去の報に接し、氏の『よつこそ地球さん』『ポッコちゃん』(ともに新潮文庫)でジュブナイル(子供向け小説)から、大

## 談話室から

人のSFへと移行していった時代を思い返し、偉大な人を失

で「冥福をお祈りするとともに、冬の時代」とも言われているSF出版の中にあって、氏の膨大かつ重要な著作が、未永く刊行し続けられることを、心よ願っております」

「仕事始めの日に星新一さん死去の報に接し、氏の『よつこそ地球さん』『ポッコちゃん』(ともに新潮文庫)でジュブナイル(子供向け小説)から、大

千葉真の谷口隆一さん。「謹ん

のショート・ショート群から大

人の活字の世界に入っていった子供は、七〇年代から八〇年代にかけて数限りなくいたと思

ます。今、そういう橋渡しをし

てくれる作家がどれだけいるか

——とつい考えさせられます。

星さんファンの方、ぜひ声をお寄せください。

12月15日の電子会議を編集しました)

小林 √なるほど、世界標準規格で漢字の拡充を訴えるにせよ、まず自分の国の漢字標準をきちんと見定めなければならぬ

のですね。その点でもこの仕事には意味がありますね。

橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則

橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則

橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則

橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則

橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則

橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則

橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則

橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則

橋爪 √「ループ」(角川書店、一月未発売)のイメージCGアート・横尾忠則



# マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

## 緑の会議室

携帯ゲーム機のゲームソフト「ポケットモンスター(ポケモン)」は昨年の大ヒット商品で、昨年暮れにはポケモンのテレビアニメに熱中した子供らが次々倒れるなど、ある種の社会問題にまでなりました。これほどまでに子供らの心をつかんだ「ポケモン」とは何か? ブームも一応のピークを見た今、関連本を通じて、「緑の会議室」のメンバーがこのゲームの秘密を読み解きます。



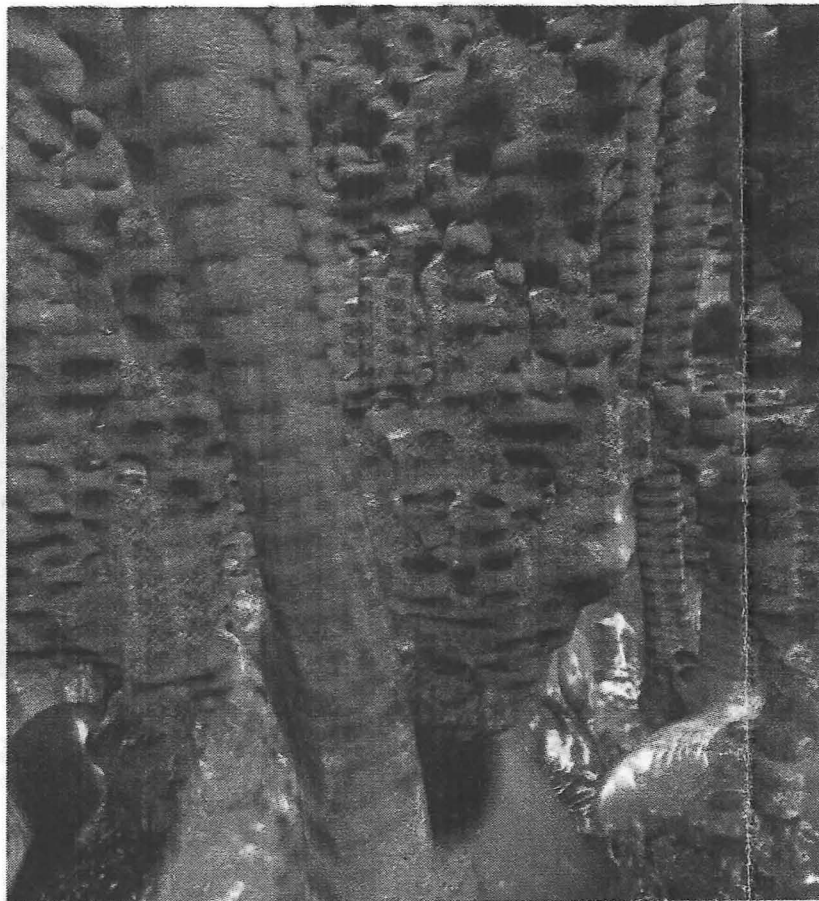
こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン 衰亡史」。はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

### 「ポケットモンスター」関連本

広瀬 〓 今日取り上げるのは、昨年暮れに騒ぎとなったアニメのポケモンではなく、本来のゲームの方の世界ですね。橋爪 〓 私は実際にプレイしたことがないのですが、公式ガイドブック『ポケットモンスター』(小学館)、『ポケットモンスター全百科』(同)などを見て思っているのは、ドラクエ(ドラゴンクエスト)と同じように迷路や町や村、洞窟や塔があるRPG(ロールプレイングゲーム)ですが、主人公(怪物)という敵対関係が変形されて、手なすけて蒐集する(家畜化・無害化する)ようになっていく点が新しい。また、通信で、獲得したポケモンを交換できる(しなげ) 小林 〓 中沢新一さんの『ポ

## 優れたゲームの世界が自然を代償でできるか?

ければならない)。手に入れたものを育て、加工して対戦させる。ここはメンコやペイコに似て 瀨名秀明著 『BRAIN VALLEY』(角川書店)のイメージ CGアート・河口洋一郎



がほとんど現実離れした英知の結晶のように描かれています。広瀬 〓 現在、言語や科学による「去勢」が強まっているのはななくて、むしろそれが弱まりすぎたために、現代人の心に、精神分析学で言う「対象a」(ア)という力によって与えられていずれば意識化できるものと、ここはよって象徴化できない無意識の欲動とが、ちょっと接触しあう境界面に発生してゐるもの(ア)が無軌道に噴出してしまっている。それに対する、ある種の常識的な枠の中への「対象a」の抑え込みに成功していることを中沢さんは評価している。

橋爪 〓 自然とか野生というものはこの世界の複雑な存在で、これに直面するところから科学も哲学も人生も紡ぎだされるのではないだろうか。橋爪 〓 子供たちは、ポケモンの交換、対戦といった、ゲームのルールのなかで仲間と関係を保つことができる。それは、一緒に遊ばなくなった(遊ばなくなった)子供たちが、それでも一緒に遊ぶための切ない工夫の心とつだという気がします。ポケモンに夢中になった子供たちは将来、このゲームによって同世代としての連帯を確認することでしょう。

前々回の紙面に取り上げた渡辺武信著『銀幕のインテリア』(読売新聞社)について、設計業界で働いているという千葉県の新井英子さんから

### 談話室から

性話で、インテリアとつく特集は、その大多数が単なる『雑貨装飾主義』としか思えないもので、何かが違うと思わざるをえません。その点、この本では空間としてのインテリアをよく拾い出していると思います。たとえば、くつろぎの場、キッチン

の役割、部屋の作りなど、普通の人が言わないことを想像も交えて解説しているのですから。日米比較されている点は特に面白く、参考になる(と)はしは。本当の意味でのインテリアを勉強する方には、いい教本になるのではと思えます。

(1月19日の電子会議を編集しました)

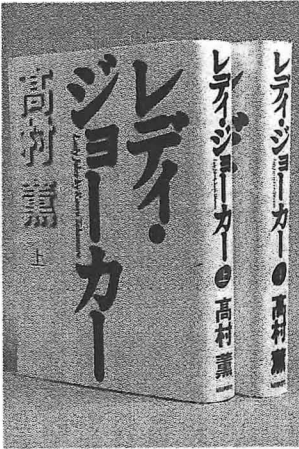


# マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

## 緑の会議室

社会でうらぶれた男たちが競馬場で出会う。鬱屈した怒りが、やがて未曾有の犯罪として爆発する。「レディ・ジョーカー」は、「企業アロ」という犯罪を通じて政治・企業・権力機構に巣くう病弊を描き、戦後日本の根源的な「社会悪」に迫るベストセラー小説。「緑の会議室」では不満も出たものの、著者の力業に脱帽ということでは一致しました。(毎日新聞社、上下各1700円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン衰亡史」。  
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。  
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

## レディ・ジョーカー

高村 素著

広瀬 √有名なグリコ・森永事件をモデルに、日本一のシェアを誇る老舗ビール会社への企業アロ、その後で暗躍する総会屋、地下金融と政治権力との癒着、それを当然のものとして受け入れてきた企業論理、警察や検察という権力機構、駆け回るジャーナリストたち——こういった構造をすべて克明に描こうとした社会派の意欲作として、そのポリウムに見合った重みを感じる作品です。

た。当たり前前の社会のしくみにならなくなってしまっているこの病理を描くのが著者のねらいでしょうが、その分「物語」としてカタルシスが得られない。警察

社長誘拐という犯罪発生まではそれなりに説得力を感じますが、事件が思わぬ展開を始め、いろいろな方面に波及していく過程で、だんだん精彩を欠くな

する「諦観」です。みな何かに失敗し、なにかを断念し、なにかを取り繕い、仕方なしにその役割をこなしている。唯一、その枠をはみ出したのが「犯罪の実行」(これだけが、組織をはみ出した自由意志の結集)のは

## 社会への鬱屈と諦観 組織人たちのおとぎ話

橋爪 √こういう小説を書くのは体力が必要でしょうね。よく売れているので、どういふところに読者がカタルシスを感じるのか、興味をもって読みました。

や新聞社など、克明な描写の説得力はそれなりに感じるので。ところが、後半は人物が消えていってしまう。ビール会社

あとというのが正直なところで。橋爪 √私が印象深く思ったのは、登場人物のすべてに共通

ずなのに、犯罪の動機がやはり貧弱ですね。被差別部落、身体障害、キャリアノンキャリア、在日、暴力団、右翼……と、マ

広瀬 √ただ、後半に入るところになると、不満も出てきました。

「日本人が書かなかった日本」(イースト・プレス、来月刊行)のイメージCGアート 横尾忠則

この物語に出てくる犯人たちは、カネが欲しかったわけでもない、名聲がほしいわけでもない、現実から逃避できるだけのおとぎ話がほしかった。彼らの願望は、読者の願望とぴったり重なります。と

小林 √確かに不満はありましたが、これだけの圧倒的な力を持つている小説の前には、素直に敬意を表したい。これだけ読者に対して不親切な小説が、なぜこれだけ売れるのか。しかし、この小説は少々緩慢な展開や、書き割りのな登場人物たちさえも小説の力にしがたかっていると思えました。

小林 √読みやすいわけでもない。まして今風でもなく、社会現象に乗ったわけでもない。そんな小説がなぜこれだけの支持を集めたかというところ、ひょと現実に社会と対峙する強度を持つているゆえだと思えます。この作品には良きにつけ悪しきにつけ、十八世紀の小説のようなテイストがあります。それは言葉を変えれば小説の原点の味でもあるのです。



浅田次郎著『鉄道員』(集英社)について、封書で感想が寄せられました。この短編集は本当に人気があります。

く花のようにやさしく弱い彼女たちを踏みつけては何の痛みも感じない、この社会の方がおもしろいのだと気づかせてくれる。でも今の日本で生きることに

は、雪国のローカル線最後の駅長さんや、閉館するスバル座の館主のような、つまみこ誠実に暮らす人々を追いやめることになるのではないかと思うと辛い気持ちになる。

生きていく人間よりもずっと人情深い。『うらぼんえ』の孫のピンチにのみがえってひと肌脱ぐいなせなおじいちゃんには「日本一」と声をかけた」

橋爪 √誰もが組織に取り込まれ、日常の鬱屈や苦渋と全体社会との関連が見取りにくくなっているいま、このような小説があることは、自己の位置を確認する手だてとなるのかもしれない。

## 談話室から

「ラブ・レター」——会ったこともない偽装結婚相手の中国人女性の遺骨を抱いて主人公の男が流す涙は、ひっそりと映

も感じない、この社会の方がおもしろいのだと気づかせてくれる。でも今の日本で生きることに

い気持ちになる。いつかの作品に登場する世ならぬ者たちは、時として

住所を添えてくださるようお願いいたします。

2月10日の電子会議を編集しました

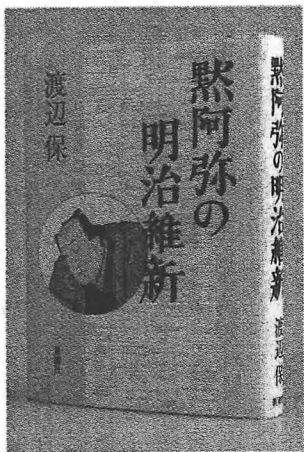


# マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

## 緑の会議室

江戸から明治を生きた河竹黙阿弥は、一般に「最後の近世作家」と呼ばれますが、演劇評論家の渡辺保さんは異議を唱えます。近代化の原点を生きた黙阿弥の作品には、明治新政府への怒りとともに、真の近代精神の芽が隠されているのでは。演劇史の書き換えを迫る力作評伝にして、日本近代の「歪み」を指摘する文明批評。緑の会議室ではどう読まれたでしょうか。(新潮社、2000円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン衰亡史」。はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

### 黙阿弥の明治維新

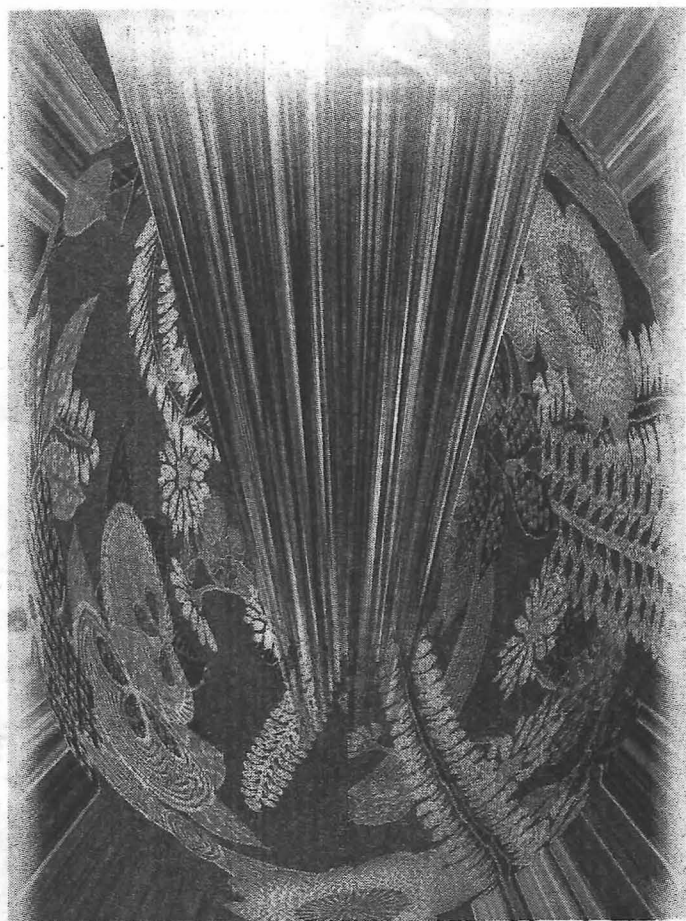
渡辺 保著

小林 √渡辺氏の評論は、とくにあまりに無理な断定、断言に鼻白むことも多い。にもかかわらず、読後、私は奇妙なほど氏の意見に同感しているのです。氏は歌舞伎に関して、現代もっともフェアで、潔い評論家だと思つ。それは常に自分の論拠を明らかにし、反対意見への道を開いているからです。

橋爪 √江戸期には同時代演劇であった歌舞伎(古典芸能となる前の)が、黙阿弥という作者とともに明治を迎える、その臨場感をよく再構成していま

## 「近代」に断罪された歌舞伎に対する再評価

岩田誠著 「見る脳・描く脳」(東京大学出版会のイメージCGアート・勝井三雄



小林 √渡辺氏が「世のもの」と呼ぶ、現代の江戸趣味に対する憎悪には同感ですが、黙阿弥の擁護者であった永井荷風がそれを決定づけたとする意見には賛成できない。黙阿弥の真の敵は、荷風のような良質な知識人ではなく、歌舞伎を頭から「前近代的な芸術」と断定するような輩であったはず。

広瀬 √明治以来の歌舞伎観と江戸趣味が積み重なってできた歌舞伎の現在こそが、著者の批判する対象なんじゃないかね。小林 √渡辺氏は八私たちがよって立つところの「近代」とはこのようにして生まれたのか?がテーマだと書いていますが、氏には現代の歌舞伎に対する抜きがたい不満があり、それが「近代」に断罪された黙阿弥という人間の評伝を通して噴出しているようにです。

橋爪 √社会学者として歌舞伎への興味は、まず上演時間の長さ。近世近代のブルジョワ演劇(ビジネス・アワー)がすでに夫婦で出かける」と、まるで観客の時間構成が違う。歌

舞伎が細切れで上演され、黙阿弥の原型をとどめなくなってしまう最大の原因がこれです。次に知りたいのは見立て、因縁などの独特のドラマツルギー(作劇方法)です。門外漢としては、歌舞伎世界の文法をまず分析してほしい気がします。

小林 √明治の末、「近代」の名のもとに、実に多くの文芸が滅ぼされ、変質させられています。俳諧と和歌は、子規によってそれぞれ「俳句」「短歌」という別物の文芸になるし、漢詩にいたっては痕跡も残っていません。文壇は三十年ほど漱石ブームですが、その陰でどれだけ文芸が旧弊と決めつけられて滅びていったかを検証するのは、実に奇妙なその意味で、本書はものすごく価値のある本だと思えます。

広瀬 √近代が近世に押しつけた「イメージ」が、事実をありのままに見るといって近代的な態度から出たものではなかったというところを、黙阿弥を通じて明らかにした点は高く評価されるべきでしょう。

小林 √いろいろ指摘しましたが、黙阿弥という、これまで正当に評価されなかった人物を、時代との関係をきつかりとおさえながら書ききっています。渡辺氏は歌舞伎を伝統芸能として江戸の思い出の中に陳列することに、徹底して反対する評論家です。本書は、明治歌舞伎の大々的な再評価につながるエポックメイキングな書物になりそうな予感があります。

(3月2日の電子会議を編集しました)

先週のこの欄で「大人が読んでも面白い児童書はありませんか」と問いかけたところ、思いがけず、いろいろはがきやファクスなどで教えていただきました。順番に紹介していきます。

### 談話室から

山のぼつけん(理論社、既刊七巻)を「親子でワクワクしながら読む本」と推薦してくれました。「トガリネズミのトガリ」と、テントウ虫のテントウ

トガリ山をめざし、いろんな動物と出会うたり、困難を乗り越えていく冒険のお話です。八王子市の小野寺千恵子さんは、ケーテ・レヒアイス著「ワルフ・サーガ」(上下、福音館書店)がお奨めです。「児童書は大人がどんどん読んだら

いいと思います。子供向けだからとバカにできません。(この本は、見えないものの力を昔から大切にしてきた日本人にぴったりの読みもの)とのこと。この欄では、引き続き「親子で読める児童書」について意見を募集します。

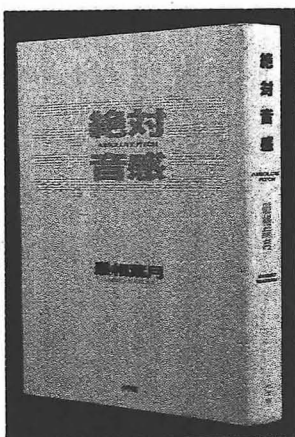


# マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

## 緑の会議室

「耳から入る音がすべてドレミの音名で聞こえる」「音の周波数が正確にわかる」——プロ音楽家の多くが持つ「絶対音感」の正体とは? この不思議にとりつかれた著者が、音楽家だけでなく、脳科学や教育の分野からも取材を重ねたノンフィクション。「緑の会議室」で見えてきたのは、近代日本の西洋音楽教育の歪み、感動を与える「音楽」のドラマだったようです。(小学館、1600円)



最相 葉月著

こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン衰亡史」。はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

## 絶対音感

広瀬 √聞いただけで音の高さ、音名が分かる「絶対音感」の持ち主は周囲にも多く、身近な「特殊能力」ですが、それを持つ人が音を通して世界をどう認識しているのか。絶対音感を持たない筆者がそのミニマリーに踏み込んでいって、音楽、幼児教育、大脳生理学などさまざまな切り口からいろいろな発見を伝えてくれます。

小林 √ぼんぼんはまったく音楽は駄目なんです、学科に音楽関係者が多かったため、音楽家にとって、絶対音感の有無がある時代まで死命を制するほどの西洋音楽へのパスポートだと本気で信じられていたことは知っていました。

橋爪 √日本の音楽教育の特性と同時に、日本文化全般の

特異性が興味ぶかく思えました。「専門教育ではドレミを音名とする固定下唱法が行なわれ、義務教育ではドレミを音名とする移動下唱法が行なわれて

いても、それが音楽の本質と関係なく独り歩きしている点が、後進国」的だと思つたのです。小林 √冷静に考えれば、本書で書かれているように、絶対

## 芸術とは無関係な能力 早期教育の愚を示す

「D・シェファー著 『マスターズ・オブ・ライト』(フィルムアート社のイメージ CGアート・金子徳明

いきました。この本はその傾向に対する解毒剤的な意味も持っていますね。

橋爪 √絵画は印象派から学び、音楽はバッハ、モーツァルトから入り、しかもそれを、平均律オーケストラで演奏するものが近代日本の歪み。ヨーロッパ音楽は、バロック音楽やそれ以前の教会音楽が大事だし、古典調律した古楽器もその辺にゴロゴロしている。もしも平均律ピアノで訓練された絶対音感があったとすると、音楽をやるのには邪魔以外のなにものでもない。マックス・ウェーバーの『音楽社会学』(創文社)に、このあたりが詳しく書いてあります。

小林 √最後の五嶋節・みどり母娘のエピソードは迫力がありますが、論理的に、いまいちそれまでの部分とつながっていないのが惜しい。

広瀬 √早期教育といっても、塾に放り込んだりそれではないオシマイというのが普通の親でしょう。節さんのようにあそこまでの親は珍しい。

・スロポドキン絵、岩波書店、品切れ)を、ずっと処分せずに大事にしているそうです。「今でも、この本を開くと、なぜか目頭が熱くなります。五十年近くも前に出た本なのに」。きつとそれは、いい思い出とともにある絵本なんですよ。

橋爪 √早期教育が加速する背景は日本の「入り口文化」(企業が大学新卒しか採らないように、入り口でメンバーを絞って内外の枠を作り、内で固まって利権を分け合う)ではないか。入り口文化では手遅れは致命傷になるし、やり直しが効かない。誰にでもチャンスがあるのはよい社会、と言えないこともないが、自分の将来にも夫にも見切りをつけた奥様がたが、子供の尻を叩いてお受験というのも暗澹たる思いがする。

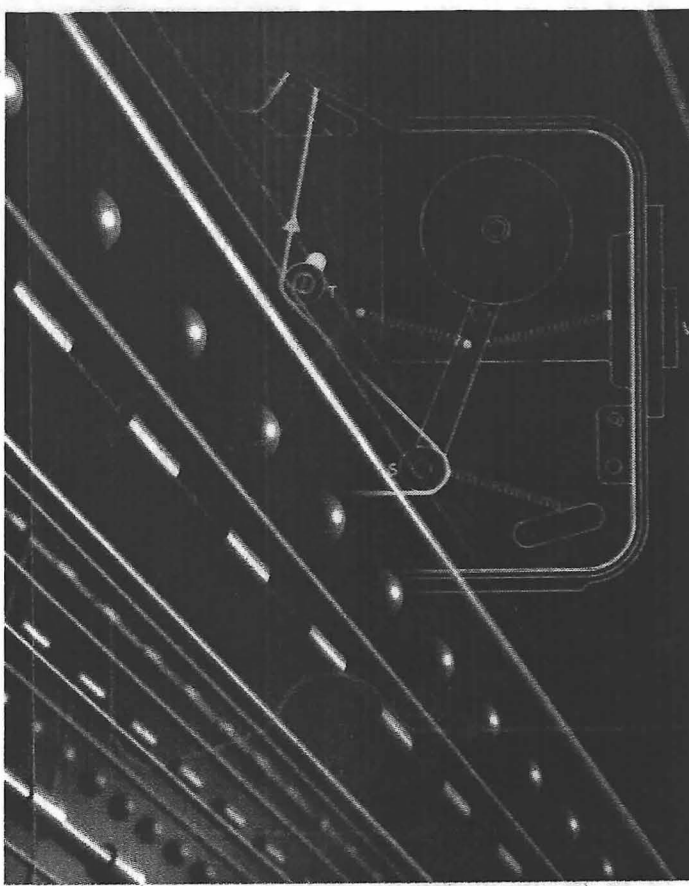
広瀬 √最近の「お受験」の最大の動機って、実は親のリスク回避行動なのでは。五嶋節さんの行動がリスクをとりすぎにはいられないというのでは正反対ですね。

橋爪 √本書は欠点も多いが、「絶対音感」という項のテーマを、よく調べて引張った。そして、人間と音楽のぎりぎりの出会い(悲しみ、苦しみ、楽しみ)の現場へと肉薄した。その緊張感に捨てがたいと思う。

小林 √ことに今後の音楽教育には、かなりシリアスな問題を投げかけたと言えます。

広瀬 √「絶対音感」をめぐる旅が、教育と大脳生理学を経て最後にたどりついたのは、絶対音感を超えるために自分と格闘する、音楽家という人間のドラマだった。そこに音楽がもたらす感動があり、演奏家と聴衆と「コミュニケーション」がある。単なる科学的発見の紹介で終わっていないことで、本書は音楽に届いたのだと思います。

(3月23日の電子会議を編集しました)



「大人も読める児童書」の続き。東京都の馬場美智子さんの推薦は「手づくりのスケート靴」(佐藤州男作、福田岩緒絵、文研出版)。「足の障害を持っている子の気持ち、大量生産時代で仕事が終わった職人の生きがいなど、いくつもの感動の場面が

ありました。本嫌いの我が子にも良かったと言われました」

### 談話室から

愛媛県の佐々木政美さんは、草壁皇子を題材にした『丹生都比売(におひめ)』(梨木香

歩著、原生林)がおススメ。「とても切ない母と子の物語。中学生くらいから十分読めると思えます」

六十二歳という千葉県の熊笹御堂様さんは、かつて子供に与えた『百まいのきもの』(エリノア・エスティーズ文、ルイス

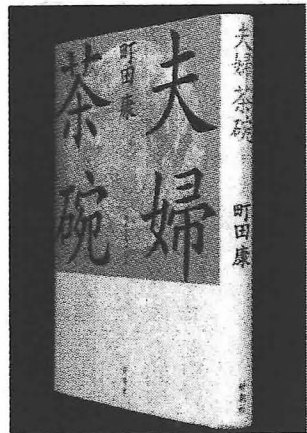


# マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

## 緑の会議室

生活能力も勤労意欲も責任感もなく、女性にはだらしなしい「こんな「ダメ男」を描いて人気の作家・町田康さんは、元パンクロックという変わった経歴の持ち主。洒落な饒舌文体で、文学界に新風を吹き込んでいます。最新作二編を収める『夫婦茶碗』はヌーボー・ロマンの系譜か、九〇年代のラップ小説か? 「緑の会議室」の評価はいかがか。  
(新潮社、1300円)



### 夫婦茶碗

町田 康著

橋爪 √たいへん面白かったです。まず何と言っても、文体の妙。切れそうでもたらら続々饒舌体というのは、会話を模したものだという説もあるそうですが、私は平安文学を思い浮かべてしまいました。

広瀬 √「町田康風饒舌体」と呼ばれているそうです。頭の無駄な回転の妙な過剰さというのか、切実ならしなさというのか、力の抜けた勢いみたいなものに流されて一気に読み切ってしまうました。『夫婦茶碗』の結びの、八わたしは負けない。茶柱。頼むよ。立ってね。茶柱。わたしは夫婦茶碗に茶柱を立てる。立ててくれます。なんかない、よこんなフリースが出て来るなあ、と感嘆する。  
小林 √こういう、端的に

ロットをたてず、文章の流れに忠実に話を進行させてゆく形式は、一九七〇年代に広で流行したヌーボー・ロマンの系譜だと言えます。ヌーボー・ロマンは

## リアリズム獲得した

## 物語解体系の饒舌体

一時脚光を浴び、日本の多くの詩人が多くそれ風の習作を発表しています。元歌手・詩人の町田氏は、そのあたりでこの技

藤川桂介著

「道鏡、狂恋を操る」(メスコ)のイメージ

CGアート―奥村敦正



「大人も読める児童書」について、愛媛県の松井チズルさんからの便り。

「『ヒルクレストの娘たち』(ルース・エルウィン・ハリス作、岩波書店)。「クウェンの旅たち」などシリーズが四冊刊行されていますが、二つの大戦

### 談話室から

間を背景に、四人姉妹の成長が描かれ、戦争の後遺症など、真剣に考えさせられる問題提起もあります。同じ岩波では『わが青春の輝き』(M・フランク

ン著)というオーストラリアの開拓時代における女性の自立の物語もあります。

地域で読書会を開いているという東京都の片倉幸子さんから、『狼とくらし少女ジュリー』(ジーン・C・ジョーシ著、徳間書店)、『よい子への道』

こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「ゼウスガーデン衰亡史」。はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

パンクロックのバンド活動を始めていたところから、まだまだヌーボー・ロマンにかぶれた世代に近いのでは? とはいえ、町田さんはバブル時代末期ごろからしばらく図書館の本を全部読むというような生活をしてい

たそうだから、あまり時期とか世代にこだわっても、的外れになるかも知れません。

橋爪 √私はこの本に、ストリートのおいを嗅ぐ思いがした。パンクは若者の言葉にならない感情・体感のようなものをリアルタイムで言葉にします。

それはラップを受け継がれていると思う。町田さんは小説という形式を借りて、そのナマのラップをやっているんじゃないか。

小林 √町田氏が物語の解体という流れに乗っているのは確かだ、その始まりとなったのが、ヌーボー・ロマンであると考えれば、両者の血縁関係はやはりあると思います。わたし自身、かつては物語解体系の作家でしたから。ただ、現在のわたしはこういう物語もしくはラップ解体系の小説を新しいとは読めなくなっています。

広瀬 √(『人間の層』)のなかに、温泉旅館の庭に住みついたネコのチヤの一族の系譜を延々と述べるくだりがあります。が、(神話主義的な部分があったり、古典落語的な語り方があ

(おかべりか著、福音館書店)などの推薦をもらいました。

「児童文学という位置づけは日本で販売される際につけられるもので、海外ではかなりの大人が読んで聞いて聞きます。読む機会を逃して損をしないで」と松井さん。まったく同感です。

ったり、これもやはり意図的に構成されているんじゃないでしょうか。徹底して町田的な世界のシチュエーションに、いろいろな文学的記憶が自在に引用されてきているのではないかと。ただ、ちょっと「うまいなあ」という点に収まりすぎてしまっような点がある、玉に瑕でしょうか。

小林 √ある意味で、ひじょうによくなれたポストモダンが町田康の小説なのではないかと思えます。その意味ではラップもまた、こなれたポストモダン音楽なのでしょう。そのこなれたポストモダンがパンクロック出身の小説家から登場したのは象徴的だと思います。

橋爪 √興味ぶかいは、そのポストモダンの小説が、コンビニ世代の卑近な日常と完全にマッチしている点です。この小説の根本にあるテーマは、世界は自分の意志どおりににはならないという偉大な事実の確認だと思つ。消費社会がふりまいた幻想は嘘っぽくたど町田文学は言う。私はそこにリアリズムを感じる。バブル以降の九〇年代特有の、この社会の水脈をつきあてている部分があるように思っています。

小林 √ヌーボー・ロマンもリアリズムを否定してません(ロブ・グリエは例外)。町田氏がリアリズムを獲得しているのは、小説形式というより彼の才質、作品の質の高さによっていると思います。リアリストティックにみえるのは、それだけの作品だという証明でしょう。(4月13日の電子会議を編集しました)



# マルチ読書

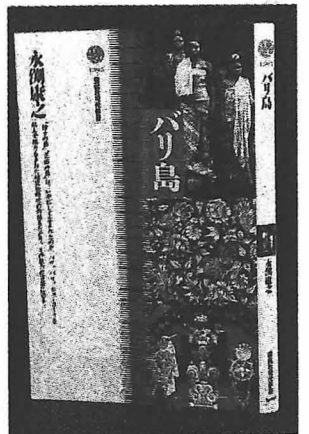
小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

## 緑の会議室

エキゾチックな国際的リゾート地として、日本でも人気の高いバリ島。その神々の島「芸術の島」というイメージは、どのように作られたのか。『バリ島』は、大戦間にオランダの植民地支配を受けた「未開の島」の文化が、いかに「文明」という視線の下に特権化されていったかをたどる知的刺激の書。バリ島フアンもいる「緑の会議室」の判定やいかに。(講談社現代新書、660円)

## バリ島

永淵 康之著



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。「カブキの日」で三島由紀夫賞。はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

広瀬 √洗練された「エスニック文化のチャンピオン」ともいうべき「バリ島」。近代によって汚されていない理想郷。そんなイメージがいかに嘘であるか、といつことを著者は解き明かしています。バリ島フアンとしての自分の視線を解剖される

での植民地博覧会を舞台に、バリ島が世界に知られるきっかけとそのイメージ形成の政治学。第三部はニューヨークに舞台を移し、汽船によるツーリズムの

ていて、安心して読みました。広瀬 √いまやバリ島を訪れる外国人観光客の第一位は日本人。本書に出てくるゴバルビテス(ニューヨーク在住のメキシ

う文化商品」を盛んに消費している現代の日本人と基本的には変わっていないですね。小林 √わたしは南海の島に行けば近代文明に忘れられた素朴な芸術心が残っているなんて夢にも思わない人間ですが、

リゾート地に成り上がったのは、また別の力が働いたはず。植民地対宗主国という対比を一步踏み出したバリ島を見たかった。橋爪 √バリ島では、かつて王家間の争いが常態であったといいますが、それが植民地化され、宗主国の圧迫と文化的な差別が新たに始まった。運良く、市場経済のなかで観光化することができたのですが、これとて、それ以外に生きていくべきがないとしたら、歓迎できることだろう。リゾートという場所は、どうもこういう胡散臭さにつきまといまいます。

と同時に、バリの人々が「バリ文化をいかに意識し」、「再構成」していったかのプロセスは、バリにとどまらずいろいろな場所の文化的アイデンティティの問題に波及するもので、じつに刺激的でした。

誕生と、「西欧文明」側がバリ島に寄せる視線の成り立ちについて。実に手際よくまとめられ

それでもバリには「何か」があったのでしよう。その魅力の部分が押さえられていないので、ちょっとわかりにくかった。バリがイスラムとオランダ帝国のはさまにいて、脚光を浴びやすい場にいたというのわかる。しかし、それと同じような条件を持った植民地は他にもあったはず。そのバリならではの独自性がいまひとつ見えてこない。

橋爪 √著者は人類学の文化相対主義、価値相対主義、中心周縁図式、フーコー流の権力分析……など、いろいろ踏まえています。そして、それは素朴ツリズムやバリ至上主義みたいなものを相対化している。けれども、たとえば日本の植民地主義や、南洋に対する視線「アジア近隣諸国に対する認識をどう批判的に克服するか。自国でこの方法が生きたければ、本物でない」という疑念が湧きます。

小林 √結局、著者は現在のバリ文化を、大戦間の奇妙な文化状況から生まれた「偽物」と考えているのでしょうか。それとも、現実にはバリ人が担っている以上、「本物」と考えているのでしょうか。

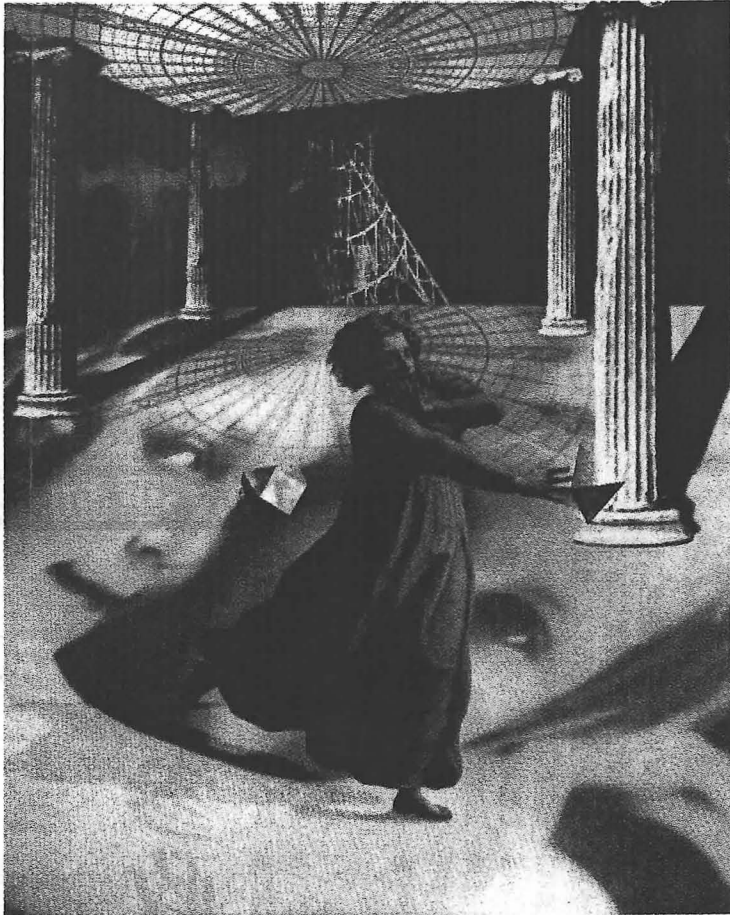
橋爪 √本書は三部構成になっています。第一部は、バリ島の存在がオランダの植民地政策にとっていかに模範的ケースだったかを扱う。第一部は、パリ

G・マイリンク著 「ナペルス枢機卿」(国書刊行会のイメージCGアート・浅野信一

小林 √むしろバリの戦後史の方に興味がある。バリはひとつとしたら戦後の方が更に大きくさまさまなパワーにもてあそばされた。それを乗り切り、大

の秘密」(評論社)。「実はタールが好きではなかったのですが、ところが、子どもたちは、本当によつて読んで読む! なんでもありの展開ですが、この作家は子どもたちを馬鹿にせず、その能力を高く評価してゐるんだなあ」と感じてきたのです」

広瀬 √伝統的な日本文化と、近代化のなかで自己再構成を経た現代の日本文化は「本物が偽物か」と問われても答えに窮する。バリについてもそれは同じではないでしょうか。文化は、地域や世界の権力構造の中に否応なくある。しかし、それ自体光を放つバリ文化の魅力、磁力に、時の政治構造や植民地権力、現地エリートたちも巻き込まれずにはいられなかった。今回、本書を書評する行為の中に、そういう文化と権力との止まることのない相互作用そのものを感じました。(5月4日の電子会議を編集しました)



以前投書をいただいた滋賀県の大西敦子さんから、「自身で書いた「大人のための児童文学講座」を送っていただきました。現代海外作家の紹介です。その中からいくつか。スウェーデンのリンダグリーン『長くつしたのピット』(ポプラ社な

ど、「ちいさいロッタちゃん」(偕成社)。「この子をとっててい作家です」

独のプロイスマー『大どろぼうホッツェンプロッツ』(偕成社)は、「笑えます! 大どろぼうや魔法使い、みんなまぬけなので、安心して読めます」。英のタール『チョコレート工場

## 談話室から

小林 √著者は人類学の文化相対主義、価値相対主義、中心周縁図式、フーコー流の権力分析……など、いろいろ踏まえています。そして、それは素朴ツリズムやバリ至上主義みたいなものを相対化している。けれども、たとえば日本の植民地主義や、南洋に対する視線「アジア近隣諸国に対する認識をどう批判的に克服するか。自国でこの方法が生きたければ、本物でない」という疑念が湧きます。

小林 √結局、著者は現在のバリ文化を、大戦間の奇妙な文化状況から生まれた「偽物」と考えているのでしょうか。それとも、現実にはバリ人が担っている以上、「本物」と考えているのでしょうか。



# マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

## 緑の会議室

「齋 たまもの」は、詩、短歌、俳句、評論と幅広く活躍する高橋睦郎さんの最新句集。贅沢な装丁に活版印刷という美しい本ですが、収録されている四百三十三句はなかなか難解で、まるでパズルを解いていくような感があります。句集は初めてという人もいる「緑の会議室」では、「共通の記憶」を基盤とした現代俳句のあり方についても論議が起こりました。(星谷書屋、7000円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。近作に「カブキの日」。  
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。  
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

### 齋 たまもの

高橋 睦郎句集

橋爪 現代詩人としての高橋さんの本は、大学のころに何冊も読んだ記憶があります。しかし、句集なるものをどうやって読めばいいのか、まずそれがつかめませんでした。強いて接点を探せば、私の実家が高橋さんの住む逗子に近く、たぶん共通に見聞きしているものが多いんじゃないかと。

す。しかし、この難解さはレベルの低さや句境の低さを隠すためのものではなく、辞書をひき文獻をひもとけばすべて水解する類の難解さなのです。その意味で、この句集はよくできた数学の問題集にも似ています。

てしか読み取れないようなもの。俳句は、いわば集団の記憶という池に投げ込んだ小石のよなものであるでしょう。とすると、現代にそうした営為は可能なのか、という疑問がわいてきます。

の叫ぶ声の哀しみを帯びた響きや、武満を悼んで鯨飲する気分というようなものを受け取りました。

△月よりの波ならわれに寄するなり。△  
小林 木の家の句は、慣用表現としての「枯れる」ではなく、作者は本当に「人間が枯れる風景」というのを創出したかったのかもしれない。その舞台装置が「木の家」で、ゆっくりに枯れつつある。そこに当たり入りたりしながら年月を重ねてゆくうちに、まるで「木の家」と歩調を合わせるようにして人間も枯れてゆくのです。△腸も戀も抜かれて海鼠かな。△などの海鼠の句は、この句集のひとつの中心ですね。この海鼠は、ほとんど先人の手垢のついてない斬新なイメージだと思います。

## 難解さを楽しむ433句 平易な現代俳句に一石

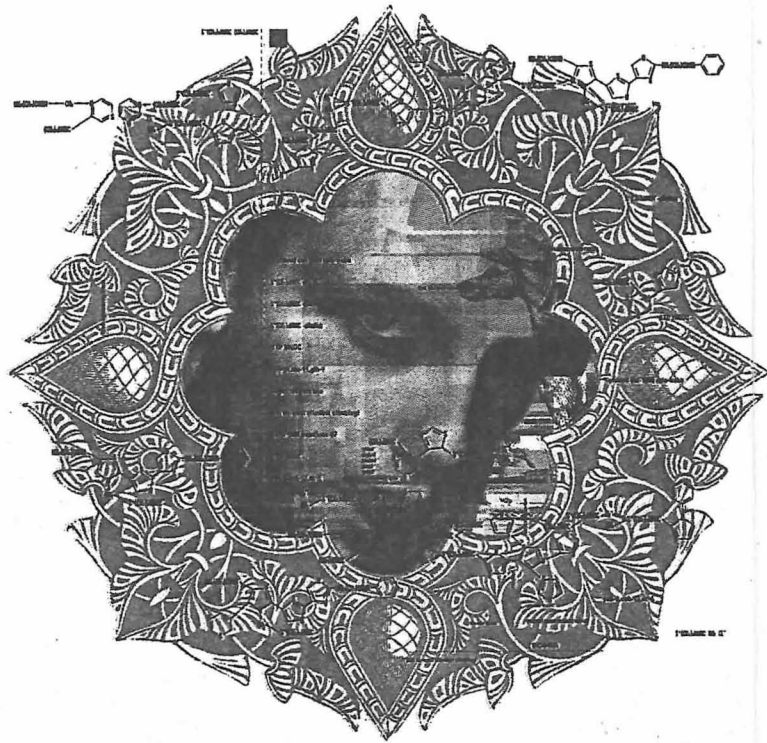
広瀬 ますます、とにかく難しかった。知らない言葉、読めない文字を辞書や歳時記の助けを借りて読みつづも、ひとつの流れてくる着られるものがある。この句集は受け止めた」といっています。

味で、この句集はよくできた数学の問題集にも似ています。

能なのか、という疑問がわいてきます。

ったことがかけられているとは間違いないと思います。鯨の叫ぶ声に悲しみをみだしたのは、秀逸な読みです。鯨の叫ぶ声は挽歌にも似てます。

橋爪 木の家は地名などの場合、行ってみたことのない人にとって、やはりどこか届かない感じがする。△雲ノ南石ノ林ニ秋ノ聲ノ響ノ名所ノに石林という場所がある。ただそれだけの意味にしか見えな。同じ雲南の句へやや寒くはの寒魚の汁。△蛇のツモノと言えは、わかった気になりますが、食べたことのない人にとって「記憶の貯水池」を呼び覚ますものなのか。



CGアート・奥村靉正  
伴野朗著  
「ラムタラは死の香り」(こーりん社)のイメージ

小林 俳句には、基本的に「知っている人優先」という、きわめて不親切なところがあります。ただ著者はロゴスを大切にしている人であり、実体験より文芸的な教養を土に置く人ではないかと思えます。

小林 文芸としての現代俳句は、急激な大衆化により、よく言は平明化、悪く言は俗化していったように思えます。わたしはこの句集が、現代俳句の流れを変えてくれるのではないかとひとさかに期待していますが、同時にその難解さが少々オーヴァーランしているようにも思えます。難解であることと認め、かつ評価する一方で、この句集は解説の手引きが出た方が幸せなと思えます。(5月25日の電子会議を編集しました)

「繽紛のゆへに微塵に空の沖」のゆへに美しい仕草(作者が)——「綴り」は「花・雪などの入り乱れ落るる様」(広辞苑)で、この場合、桜が空のかなたに飛び乱れていく様子。

「齋」には「このゆへに、碎書と首つ引きてないと読めない」といふ意もあり、昔の女性よしの難しい句が頻出します。

### 談話室から

しかも、ルビは必要最小限にとどめられ、ルビの代わりに、読みを誘導する「捨て仮名」が振られているのも特徴です。

著者の高橋さんは、「ルビ」の代りに、自分を読んでもほいほいので、ルビを少なく、捨て仮名を入れました。読者も一緒に句を

のなぞ解きを楽しみ、遊んでほしい。詩歌の良さは意外性と意味の不確定性にあるという論があります。全く同意です。この句集は、わかちやすさのある現代俳句に対しての「一石」です。話しています。腰を据えてじっくり読む句集だと言えます。



# 読書マールチ

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

## 緑の会議室

少年犯罪、カルト宗教、「ごころ産業」の盛況……。本書は、文化人類学者の上田紀行さんが「癒し」をキーワードに、どこか狂ってしまったこの国のシステムの克服を論じたエッセー集。表層的な癒しブームを批判する著者は、へつなり型の癒しから、真の個の確立による癒しを提唱します。「緑の会議室」では、「癒し」のとりえ方について議論が沸騰しました。(法蔵館、2000円)



上田 紀行著  
こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。近作に「カブキの日」(講談社)。はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

## 日本型システムの終焉

上田 紀行著

小林 √固い論文集かと思っ  
たら、むしろ気軽なエッセーを  
集めたという印象。発表媒体が  
さまざまなか、統一感がな  
いことは否めませんが、その分  
気軽に楽しめました。とくに現  
代の学生気質と並行しながらの  
教育論が面白かった。

橋爪 √「癒し」をテーマに  
したところ、日本の今を感じま  
した。本書によると、著者は学  
校に過剰適応した存在で、母親  
との葛藤に苦しんでいた。その  
反動としての目標喪失、自我の  
空虚感が発生し、二十代の全部  
を使って、そこから脱出をは  
かる。それが非常に多くの若い  
人びとの普遍的な体験と重なっ  
ている。

## 個の確立欠いたままの癒しブームへの警鐘

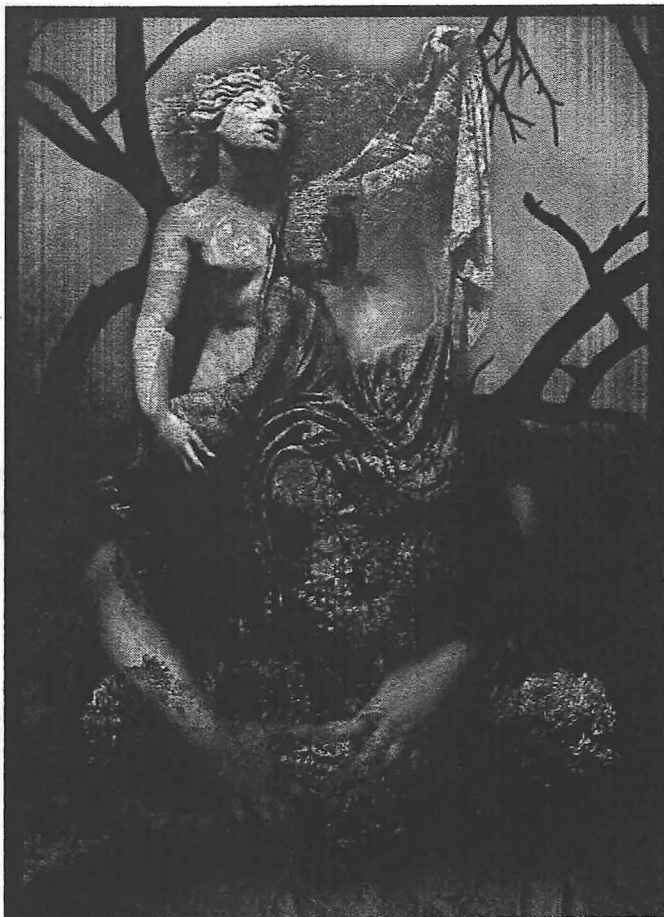
小林 √著者は癒しブーム  
の怪しさをえぐるだしているわ  
けですが、その反面、現代人が

癒しを必要としているとも感じ  
ている。この現代の癒し渴望へ  
のひとつの答えとして、スリラ  
ンカの対人関係の病を癒す陽気  
な「悪魔払い」の祭りを挙げて

りも、特定の目的に対する効率  
を徹底して追求した「合理性」  
の発露(とそれによる抑圧)だ  
が、そのまま「悪魔払い」の正  
当性につなげられている感じが  
クロソフスキー著  
「ディアーナの水浴」(水声社のイメージ  
C&Aアート・浅野信二

います、これがうまく実感で  
きない。スリランカ社会が日本  
社会の対極にあるといふこと  
が、そのまま「悪魔払い」の正  
当性につなげられている感じが  
クロソフスキー著  
「ディアーナの水浴」(水声社のイメージ  
C&Aアート・浅野信二

でも、特定の目的に対する効率  
を徹底して追求した「合理性」  
の発露(とそれによる抑圧)だ  
が、そのまま「悪魔払い」の正  
当性につなげられている感じが  
クロソフスキー著  
「ディアーナの水浴」(水声社のイメージ  
C&Aアート・浅野信二



小林 √だが、このなかからつ  
いては、誰かが病んでいるという認  
識を人びとに共有させると同時に  
に、それを克服する方法があっ  
て、それは学びつづけるというメッ  
セージを含むわけです。これは  
私には、イシューに映る。

広瀬 √過剰な生真面目さ  
は癒しが必要。では「要領のよ  
さ」に対しては何が必要なんだ  
ろう。むしろ、多数の人々が、  
それほど生真面目に「効率性」  
や「意図」に同化するとなへ  
いわば、柳に風を受け流すこと  
に長けていて、それだからそ  
れ順で大人しい。だけれども追  
いつめられもせず、淡々と過  
していることが、深刻ではな  
いのだろうか。

『ねえ神さま』(文芸春秋)  
などで人気の漫画家ねえのさ  
んが、先月十日に亡くなり、自  
殺と報じられました。「詳細を  
知らないんですけど」という読  
者からの書き込みがありました  
が、その後もあまり詳しいこと  
は分かっています。

ただ、『ねえ神さま』を連載  
していた月刊「コミックブレ  
ン」が、七月号が二十  
日の追悼特集を組んでいます。  
この特集に、死の二日前に描か

れたという最後の作品が掲載さ  
れています。3日起きてた  
り30時間寝てたり……世の中  
リズムとはだいぶズレてしまっ  
た……ガラス窓の外はまるで異  
次元のようだ……と、どこと  
なく、生きることの疲れた漫画家  
の内面がにじみ出ているよう  
な、胸をつかれます。

改めて『ねえ神さま』や『ね  
えのさの食堂』(白泉社)などを  
読み返してみましたが、ものす  
ぐらシニールで残酷な世界を、  
かわい絵とユーモアで中和し  
ているような独特の世界です。  
ご冥福をお祈りします。

来週は「青の会議室」  
思考のための  
文章読本  
(長沼行太郎著  
ちくま新書)です。

# 読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

## 緑の会議室

荒川区の高層マンションで起こった一家四人惨殺事件。しかし、被害者たちは、本来そこに住んでいべき家族ではなかった。彼らは一体、どこから来たのか？ 宮部みゆきの最新長編は、「家」をめぐる欲望の果てに、運命を狂わせた人々を描く戦慄のミステリー。「緑の会議室」では、パブル後の日本人の心象を浮き彫りにした手腕に、賛嘆の声しきりでした。(朝日新聞社、1800円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。近作に「カブキの日」。  
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。  
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

### 理由

宮部 みゆき著

広瀬 √家という箱と、家族というその中身の変質をめぐって展開されるミステリー。五百七十ページに及ぶ長大な作品で、ストーリー展開で引く張っていきよつなタイプの小説ではないにもかかわらず、持続感を持って読み通させる力作でした。

## 「家」めぐる欲望と惨劇 都市生活の深層えぐる

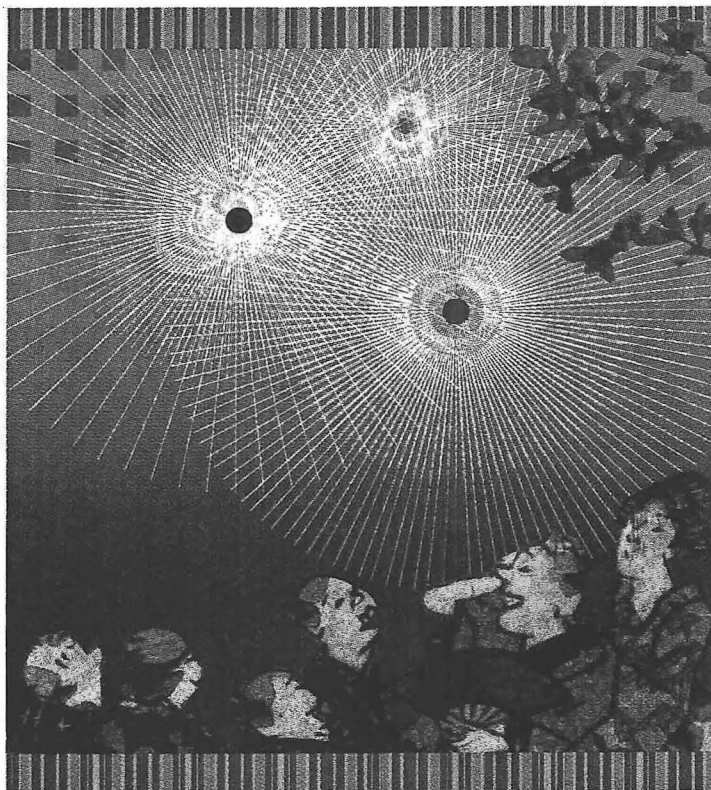
小林 √家族の事情のきりとり方が、きわめて鋭いですね。どこにももあるよつな話を実に魅力的に提示している。抑圧された男性たちの印象が強い小説ですが、それをうきだたせているのは女性の描写。構成力もすばらしいが、著者の強みはやはり女性キャラクターの彫りの深さにあると思えました。

層マンションそのものが、ポストパブルの日本の心象風景になっているように思います。事件をきっかけに、マンションのよつな多くのセル(箱)にわかれて住んでいる無数の人びとの、かすかな関わり、因縁めいた情念や、利害や無関心などが浮き彫りになる。そうして一つひとつの家庭の内情や人びとの内面を、相対化しつつも中心のない図柄に織り合わせる。都市生活の内実にくい込む訴求力が、こ

「藪の中」のような、ある混乱が生み出されています。  
橋爪 √個々の証言には「証言誤差」がつきまといつから、証言がピタリ互いにはまりあうことはなく、微妙に細部が食い違つ。実に社会的な視点で、社会学では、個々の視点に從属する

を下げたよつな印象の文章ですね。著者の現代物をいくつか読んだことがありますが、ある登場人物の視点から語られることが多く、スピード感を持って駆け抜ける感じ。それとはまったくこの作品は違っています。新しいチャレンジに成功した作品といえると思います。

小林 √この物語に登場する多くの人たちは、「自分の家」が欲しくてたまらなかつた。その欲望をめぐって犯罪が起こるわけですが、パブル以降の不動産ブーム局面に入ってから、住む場所は住む間だけ使用料金を払えばいいという感覚の人々も出てきた。むしろそこから現れてくる生活感レベルからの変化の方が、より根本的な変化になるかも知れません。その意味で『理由』が描いた家族の変質は、過去から切れることができないものの変質だったのでないかと思えます。



CGアート・奥村 鞞正  
杉浦 日向子編著  
「お江戸 風流さんぽ道」(世界文化社)のイメージ

橋爪 √高村薫さんの『レディ・ジョーカー』(毎日新聞社)との類似で思うのですが、犯行の本質が、特異点のように語られないまま残されている印象を受ける。『レディ・ジョーカー』は途中から、犯人グループの行動がつかみにくくなっていくし、『理由』では、犯人の証言をつるぎでできないという具合に、読者に対して閉ざされている。

小林 √この作品はもはやミステリーというジャンルのみならず、日本文学全体を代表している作品になっていると思えます。これは作者が私たちの社会に対してきわめて深い洞察を有していることを表しています。  
(7月6日の電子会議を編集しました)

先週のこの欄で紹介した、おのきがく著『かたあしだちょうのエルフ』(ポプラ社)を家族で読んだという大阪府の川勝秀資・千尋さんからメールをいただきました。

「小学一年生の息子に感想を尋ねますと『もう口で話すとこ

ができないほど怖くって悲しかった』と、本の表紙を見るこの

のなにかもいれませぬ。誰よりも早く走れるだちょうのエルフは、弱い動物たちを守るため、自ら肉食獣の犠牲となり

再び弱い動物たちを守るのです。現在の世の中、自らを犠牲にしても、他人のために何かをする勇氣や、大いなる優しさを子どもに教えてゆくことは、とてもむずかしい。息子がこの本を本当に理解できる人間に育ってほしい、と心から思います。」

### 談話室から

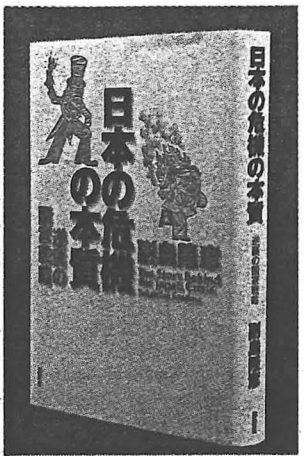


# 読書マールチ

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

## 緑の会議室

経済再建を掲げる小沢政権が多難な船出をしましたが、「日本の金融危機をアメリカに波及させよ」と過激な主張をしているのが評論家・副島隆彦さんの新刊。米の「親日派」政治家らによって日本がいかにか巧妙に支配されてきたかを説き、「日米対等」の幻想を打ち砕きます。かなり粗っぽい語り口のようにですが、「緑の会議室」はその妥当性をどう評価したでしょうか。(講談社、1800円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「カブキの日」。  
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。  
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

## 日本の危機の本質

副島 隆彦著

橋爪 √本書を買くモチーフは「経済と政治は連動している」といこと。当たり前のようですが、戦後日本の高度成長が、軍事・外交を脇に置いて経済に専念し、政治と経済の連動する関係を忘却したことでたらされたことを考えると、根本的な指摘です。そして、この当たり前の事実にもとづいて、戦後日本人が当然と考えてしまった通念を破壊していく。

橋爪 √著者の民主党・共和党を軸にするアメリカ思想地図は、丹念に組み立てられているとは思いますが、一方、経済問題は、データを巧みに組み立てているけれど、専門家から見れば、

## 日米「対等」の幻想砕く 挑発的議論だが粗さも

小林 √一読、頭をひねったのは、果たしてどういふ本として書かれたかという点。論文の延長線上にある真面目な研究書として書かれたのか。それともテリー伊藤氏の「お笑ひ××」的なノリで書かれたのか。

が、その主張が多くの読者に伝わるよう、著者自ら言う「言論商売人としての技」を思う存分

「ハムレットマシン」(未来社のイメージ) ハイナール・ミュラー著

裏付けのとれない危うい議論と評されてしまつてもいい。しかし、その大柄な構図において、本書は不思議な説得力を持つ。バブル期やポスト・バブル期を通じて、アカデミックな世界の人びとが持つ有効な発言を記してなかつたからです。

広瀬 √著者はマジだと思いついて、

「ハムレットマシン」(未来社のイメージ) ハイナール・ミュラー著

「ハムレットマシン」(未来社のイメージ) ハイナール・ミュラー著

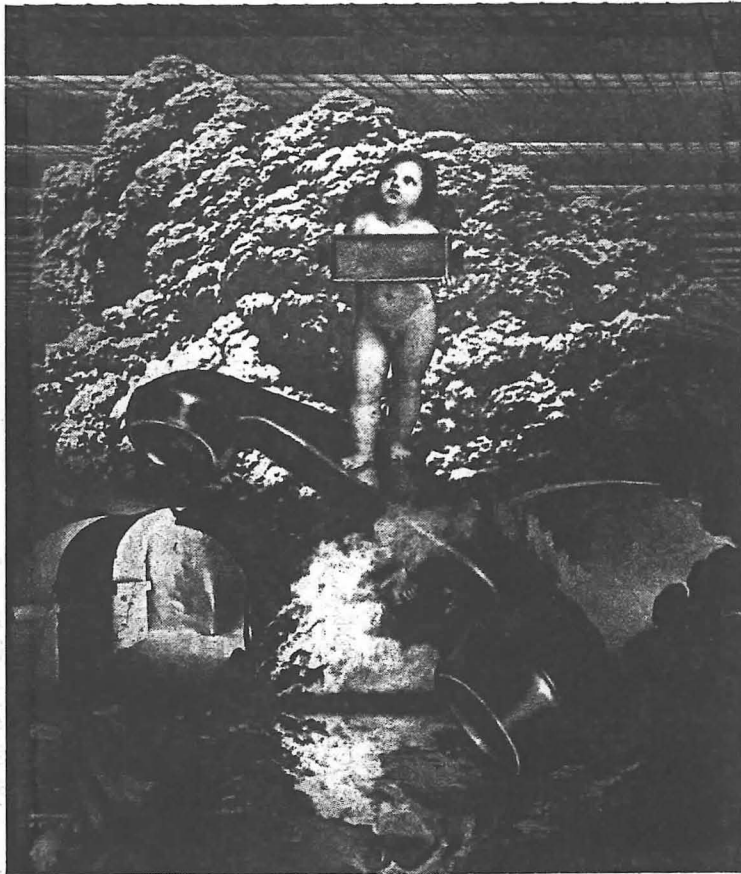
小林 √たゞは「大蔵省の隠し資金はどこにあるか」という節。「大蔵省は、どうやらあと百兆円の隠し資金を持っている。(中略)この大蔵省のヘソクリ百兆円のありかは、自民党の首脳たちも知らない。政治家にさえ絶対に教えないのだ。」

広瀬 √十数年前に佐々木毅さんが「現代アメリカの保守主義」(岩波書店)を著して以降、

「ハムレットマシン」(未来社のイメージ) ハイナール・ミュラー著

「ハムレットマシン」(未来社のイメージ) ハイナール・ミュラー著

小林 √たゞは「大蔵省の隠し資金はどこにあるか」という節。「大蔵省は、どうやらあと百兆円の隠し資金を持っている。(中略)この大蔵省のヘソクリ百兆円のありかは、自民党の首脳たちも知らない。政治家にさえ絶対に教えないのだ。」



書き込みの常連さんには女性が多いせいか、少女漫画の話題も結構出ます。

東京都の佐藤真美さんは高校受験の時に細川智栄子『王家の紋章』(秋田書店)というエッセイプットものにはまって、たてまつす。「あのくどい絵、印象深い

な。大学受験の時は、大和和紀『あさきゆめみし』(講談社)だったとか。

『王家』は秋田書店の『プリンセス』も二十年も連載さ

## 談話室から

れています。この雑誌のファンだったという神奈川県森原子さんは「青池保子『エロイカより愛をこめて』(これも連載中)、あしはゆは「悪魔の花嫁」(池田悦子原作)など、よいマンガがいろいろあります。

佐藤さんは「働く女性が増

え、その中には家庭を持つ人もいる。しかし、両立できている人は何人いるのか。どちらか一方をとる場合、女にとって幸せな道とはどう考えますか。

少女漫画も恋愛成就イコールハッピーエンドでは済まない時代です。

小林 √本書の位置がクリアに見えてきた。そういう流れの上にある本なのです。

(7月27日の電子会議を編集しました)



# マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

## 緑の会議室

ヤクザの都合で、若い中国人<sup>シマ</sup>夫婦と「偽結婚」させられた中年の客引き。形だけの同居のはずが、次第に男は媚婦に、かつて失った「家族」を見いだしてゆく。直木賞受賞以来、乗りに乗っている浅田次郎さんの短編集は、職人的技巧に支えられた熱い感動が味わえる逸品ぞうい。「今、もっとも泣かせる」と言われる作家への、「緑の会議室」の評価はいかに。(光文社、1500円)



浅田次郎 著  
こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「カブキの日」。  
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。  
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

### 見知らぬ妻へ

浅田 次郎 著

小林 √剛速球派でも変化球派でもないのに、おそろしくキレがいい。笑劇風ありハードボイルド風あり、大衆劇風あり、色どりのすがすがしく、どわもじり著者の味がついている。しかもときどき胸元に速球が来て、油断するといきなり涙腺をゆるめられたりする。

広瀬 √読者に強い揺さぶりをかけてくるわけではない。それなりに予期される範囲の物語であって、安心して読める。しかし、琴線に触れる箇所をしっかりと押さえている『鉄道員』(集英社)も安心して楽しめる小説揃いでした。

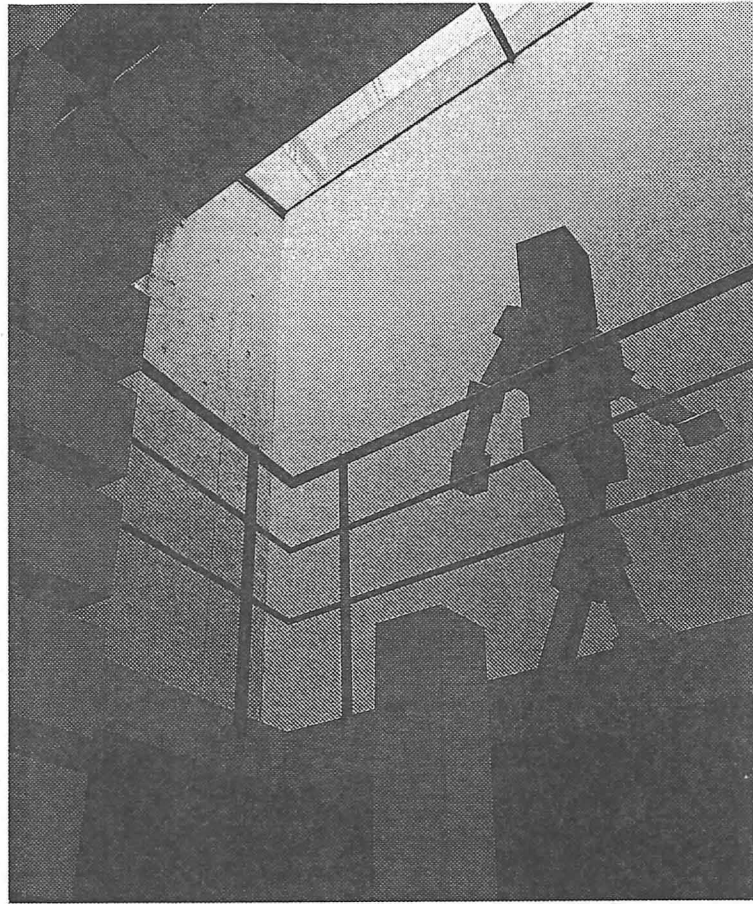
う。著者の小説に登場する多くの人物は、古典的で幸福な家庭像を信じている。にもかかわらず、その幸福な構図から追放されていく。その欠損を際立たせ、埋め合わせるため、作者は幽霊さえも登場させるわけです。

## 欠損した家庭 際立たせ 新しい小説風景に昇華

山根一眞 著  
「文庫版メタルカラーの時代」(小学館)のイメージ  
CGアート・奥村鞆正

小林 √まさにそんな家庭の欠損がストレートに出て、それが新しい小説風景にまで昇華して、見知らぬ、つまり偽結婚の相手であるからこそ、深い愛が育ちうるという倒錯した風景につながります。

小林 √その批判は正当だと思います。ただ、他の作品にどこか既視感があるのに比べ、見知らぬ妻へや「ラブ・レター」は独自で、著者以外には書けないと思う。もし辛辣な現実の中から、甘美な嘘をすくい上げるのが作家の役割だとすれば、浅田氏はこの両作でそれを示したと言えましょう。



広瀬 √たしかに、この短編集には、どうしてもはみ出さずにはいられない過剰さは登場しません。同じ歌舞伎町を舞台にしても、村上龍「イン・ザ・ミッドナイト」(読売新聞社)の殺人鬼は登場しないし、馳星周「不夜城」(角川文庫)のニヒリズムも出てこない。どこか安心して読めるまっとうな感覚に訴える物語に収斂していく。

小林 √なるほど、この小説を読むことがある種の癒しにつながる。同時に、小説の登場人物たちもどこか癒されているような部分がありますね。

8月17日付の談話室「女性は仕事と家庭を両立できるか?」について、神奈川県の大竹美由紀さんから手紙が届きました。「女性はかりでなく、男性もこの問題を自分のこととして考えなければいけないのではないのでしょうか。一般的に、男性は

家庭のことは女性に任せておいて当たり前という認識があまりありません。仕事のために生きる人、何とか両立させている人、家庭にいる人、そのどれであっても、それぞれの苦悩や幸せが必ずあるでしょう。幸せは生活の様式でなく、苦悩や悲しみを自分の

は明らかです。「耳が痛い方もいるかもしれませんが、仕事のために生きる人、何とか両立させている人、家庭にいる人、そのどれであっても、それぞれの苦悩や幸せが必ずあるでしょう。幸せは生活の様式でなく、苦悩や悲しみを自分の

中で昇華して、それを幸せに変える力を手に入れたいと持っているかというところなのではないでしょうか。大竹さんは「ナイールの王冠」という昔の少女漫画を探しているようですが、手がかりがありません。ご存じの方は一報を。

広瀬 √中国人たちは、日本人作家の作品世界の中でまだ「新しい風景」としてしか登場していない。その点では、浅田氏の作品も、馳氏の作品もそれほど変わらないのではないかと思います。

(8月17日の電子会議を編集しました)

### 談話室から



# 読書マルチ

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉(在ロンドン)

## 緑の会議室

旧日本軍が中国で行った破壊行為について、実際に手を下した将兵に「罪の意識」があったのか。精神医学者である著者が、中国で捕虜となり帰国した元将兵に、過酷とも言える徹底的な聞き取りを行った記録。元将兵にとりまらず、組織内における「感情の抑圧と欠落」という、戦後日本人の心性までが浮き彫りにされ、「緑の会議室」でも議論が沸騰しました。(岩波書店、2000円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「カブキの日」。  
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。  
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

### 戦争と罪責

野田 正彰著

広瀬 旧日本軍将兵の戦争体験についての綿密な聞き取りと、その時の心理を掘り下げた本ですが、それが戦後の日本人の精神の問題を追究するものとなっている。戦争体験を完全な同時代体験として扱っている希有な本ではないでしょうか。

橋爪 だが、野田氏の聞き取りの中心になるのは、シベリアに抑留されたあと戦犯として中国の捕虜収容所に収容され、「思想改造」されて帰国した将兵たち。こういう体験をした人

## 元将兵が語るのは 戦後日本人の心性が

とには限界はないのか。また、日本人の心理と欧米人のそれとの違いを言い立てるのは、新たな免罪及び断罪への道をひらくことになりませんか。

橋爪 何年も収容所監獄に閉じ込められた人間の証言は信用性がないという意見がありますが、証言価値はあると思う。中国側に明確な政治的意図があったことは確かでしょう。しかし中国側の取り調べは、事実関係を調査し、裏付けをとるといふ慎重なやり方です。元将兵たちが自ら証言した内容について

道に反していようと、ほとんどの自責の念なしに行われている。この点が、日本軍(ひいては日本人のつくる組織)を考える場合に重要だと思いました。

野田 聞き取り調査といえども、聞き手の主観や解釈が入りこんでいる、という点を考慮しなければなりません。

小林 野田氏は戦争で残虐行為をした元将兵の心理と現代日本人の心理は、「攻撃性」といふ一点で変わっていないとい

広瀬 集団の中への同調が最重要視される社会。この社会に適応した日本人は、戦場で精神的に傷つかない人間になった。そして実は戦後日本でも、集団が割り振る役割をそつなくこなし、適応に努める人たちが埋め尽くされてきたのではないかと。本書の主張には説得力がありますが、他方、それが戦争体験の聞き取り調査から引き出されたことに対して、途方に暮れるを得ないのも確かです。

小林 野田氏は時として、彼らの心理を明らかにするために、相手に対して非常にシビアな姿勢をとります。しかし、それは、自分にも跳ね返り、自分の心理も明らかにする苦痛に満ちた行為であるはず。にもかかわらず、野田氏は問題を突き放しすぎている感じがします。

橋爪 著者はしばしば、聞き取り相手が「心が傷ついている」「本当にありあつて相手」の心を感じやういふ「ない

広瀬 著者は「悲しむ力」といふもどろろとした感情を登場させます。しかし本当にそれで戦後日本人の心性の問題が解決されるのだろうか。確かに耳ざわりのいい言葉であり、安心する結論ではありません。しかしドイツ人の行ったような自分自身に対する思想解剖とは違つような気がするのです。

小林 なるほど、その言われると本書の見方が変わってきますね。わたしには正直に言うて辛い読書でしたが、著者自身もまた苦しい葛藤をしていたことが理解できます。

10月14日の電子会議を編集しました。



タデウシュ・カントール著 「くたばれ、芸術家！」(作品社)のイメージ CGアート・浅野信二

今回のセッションより、広瀬克哉委員はインターネット経由で英ロンドンからの参加です。今月から一年間、ロンドン経済大学に留学中だからです。時差が八時間なので、日本での開始時刻が午後七時だったのに対し、ロンドンでは午前十一時だった

### 談話室から

つものように夜でなく、窓の外には白昼の明るい風景があることらしい。日本でインターネット

トを使っている、たとえばCNNやニューヨークタイムズのホームページを見たことがある人は普通にいるでしょう。英国からインターネットを見たり書いたりするのも同じ。唯一の違いは時差、それから取り上げる本を物理的に送ってもらつていただけ

はないういふ「ない」が、かつて「青の会議室」の篠原一委員が旅先のウィーンから参加したことがあります。こういうことが実に簡単になりました。何十年のことなのに、インターネットが普及する前と比べ隔世の感があります。

# マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉(在ロンドン)

## 緑の会議室

殺人を犯し、かつて育った修道院兼教護院に舞い戻った「僕」。汚物にまみれた農作業の合間に、「僕」は苛烈な暴力衝動に身を任せ、「神の園」の偽善に唾を吐く。花村萬月さんの芥川賞受賞は、著者がすでに中堅の娯楽小説作家だっただけに、大きな話題となりました。「緑の会議室」では、この自伝的と言われる作品の「救いのありか」に議論が集まりました。(文芸春秋、12380円)



花村 萬月著

こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「カブキの目」。  
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。  
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

## ゲルマニウムの夜

橋爪 最近、雑誌のグラビアなどに、猫を抱いて坊主頭でよく現れる花村さん。どんな文章かと読んでみると、なかなか重量感があつて感心しました。

小林 ますます物語展開がスピーディーかつ濃厚ですね。修道院という舞台設定のせいでも、倫理感から生まれるエロチシズムが、くらくらするほどのリアリティで描かれています。

広瀬 描かれているのは、暴力、性、農場での家畜や残飯の扱いなど、身体感覚に訴えるものなのにもかかわらず、むしろ観念的な印象を与える作品ですね。

橋爪 印象深いのは「舞踏会の夜」のじじいのシーンでした。先輩が「僕」を毎晩屋上に誘い出し、ガッツ、ガッツ、キックガッツ、とパンチを浴び

## 「百の言葉より一発の拳」 清澄な暴力の文学

せ、蹴りを入れ、男性器を手で奉仕させる。この逃れようのない状況の延々たる持続。そして最後に、それを一発で逆転させる「僕」の必殺のキック。医学

直木三十五著  
「仇討ち」(KSS出版)のイメージ  
COURT・奥村敦正



COURT・奥村敦正

その構造に主人公が徹底して自覚的であり続けるところが凄みを感じさせ、また逆説的にある種の「救い」を感じさせます。舞台の修道院は、世俗的秩序を超越する世界であると同時に、現実的には体制そのものである。

小林 作品中で大きな役割を果たしているのが糞尿です。他に糞丸(手にする射撃)ソドミ、豚の交尾、残飯といったものが効果的に使われます。そしてこれらは奇妙なほど不潔感がありませぬ。不潔に見えるのは修道院であり、修道院という組織であり、更に言えばカトリックという宗教の方。こうした貴族の逆転、美醜の混乱は常に暴力を基軸としてなされており、改めて文学における暴力の力を思い出させられた気がします。

橋爪 自伝的要素を含むという点ですが、この作品が十分に観念的だと思えば、著者が自身の体験を、意味づけ、昇華するのには成功しているからだと思います。僕が拳を多量に蹴りあげるのには、じつは言葉と

その背後に潜んでいる神に対する嫌悪からなのかもしれない。僕は信じようと足掻いているのだ、百の言葉より一発の拳である、と。だが、それは逆説的に僕の言葉に対する不信をあらわしているのだ。正確な、簡潔な言い方のなかにみなみなならぬ思索の履歴が感じられる。

橋爪 僕は、今後その外側に突き抜けていって欲しいと思います。

神奈川県の森順子さんからナンシー関さんの『何様のつもり』(角川文庫)と『信仰の現場』(同)を読んだの感想。

### 談話室から

人確かに存在するのだと思う、どこにいても見えたことのない人。で、著者は寅さん映画の封切り初日に映画館に行って、幻の庶民が実在することを確かめ

る。(わたしも寅さんを映画館まで見に行ったことがあるという点に会った事がないぞ)「森さんの判定では、「ブライアン管を通じて見てあげた」『何様のつもり』より、実際に現場取材している『信仰の現場』の勝ち」なぞです。

とつづいて、森さんにとって幻の庶民とは「ナンシー関の本を買った人」なぞで、(そう言いながら自分はいっかき読んでいるわけですが)、なるほど、ブライアン管を通じて見てあげた人を見たことがない」というのは一面鋭い実感でしょつか。

10月6日の電子会議を編集しました

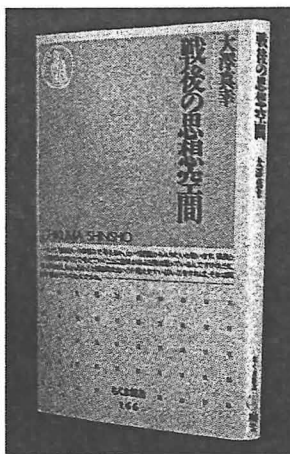


# マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉(在ロンドン)

## 緑の会議室

「現在は戦前である」という意外なテーマで始まる本書は、オウム真理教事件と二・二六事件、「近代の超克」論とポストモダンの類似性を指摘し、戦後五十年の思想状況を、約六十年を隔てた戦前思想との関係から考察する斬新な戦後思想論。現在の日本が直面する困難が、昭和初期のファシズム期に似ているという指摘は、「緑の会議室」のメンバーを驚かせた。(ちくま新書、660円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「カブキの日」。  
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。  
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

## 戦後の思想空間

大澤 真幸者

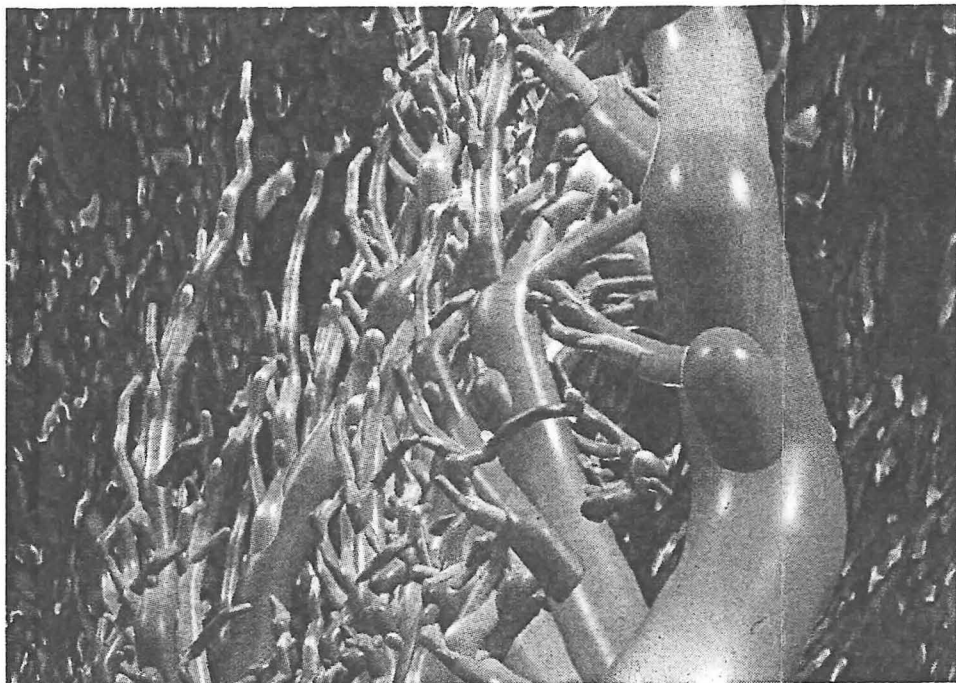
橋爪 著者は力量ある社会学者で、前から注目してました。この本はスケールが大きく、アクチュアルな問題提起をしていると思います。戦前と戦後の思想状況が六十年を隔てて似ているという指摘は、柄谷行人氏の論としてありますが、細部の肉付けが素晴らしい。

の使った「精神(ガイスト)」という共通項を通して。広瀬 著者は「超越した他者の不在」という空虚を埋めようとする悲劇的な試みの挫折として同じ意味を持つ。「いまが戦前である」という意識を持つことにより初めて、昭和二十年のカタストロフへの歩みを繰り返さないことができるというところがしっかりと確認されます。

パウル・クレイ著

「無限の造形」(新潮社)のイメージ

CGアート・河口洋一郎



橋爪 著者がこのテーマにたどりついた理由は、戦後日本における「ポストモダン」思想への反省からだと思う。ポストモダンを同時代の思潮として受け入れてきた著者は、一方、ポストモダンと時代とのかみ合い方どこか違和があることも、しっかりと見ていた。そこで、戦前にはやはり近代を越える試みであった「近代の超克」論が、軍国ファシズム(不正確な表現だが)に同調し、融解していったプロセスと重ねあわせることにより、ポストモダンが戦後思想空間において持つ意味を、計測し根拠づけようとしたのではないか。

## 「戦前」という鏡から 脱「相対主義」さぐる

橋爪 著者は本書の最後で、超越した他者を持たない空虚を天皇制ファシズムなどで回避するのではなく、「まとも」に引き受けなくてはならない」と述べています。そしてその方法は「自由な社会をいかにして実現するか」という問題と連動しているとも。非常に感動的なエンディングですが、もうちょっと踏み込んでほしかったですね。講演記録という形ですが、もう少しまとめて良かったんじゃないでしょうか。

橋爪 著者は本書の最後で、超越した他者を持たない空虚を天皇制ファシズムなどで回避するのではなく、「まとも」に引き受けなくてはならない」と述べています。そしてその方法は「自由な社会をいかにして実現するか」という問題と連動しているとも。非常に感動的なエンディングですが、もうちょっと踏み込んでほしかったですね。講演記録という形ですが、もう少しまとめて良かったんじゃないでしょうか。

広瀬 著者は本書の最後で、超越した他者を持たない空虚を天皇制ファシズムなどで回避するのではなく、「まとも」に引き受けなくてはならない」と述べています。そしてその方法は「自由な社会をいかにして実現するか」という問題と連動しているとも。非常に感動的なエンディングですが、もうちょっと踏み込んでほしかったですね。講演記録という形ですが、もう少しまとめて良かったんじゃないでしょうか。

橋爪 著者は本書の最後で、超越した他者を持たない空虚を天皇制ファシズムなどで回避するのではなく、「まとも」に引き受けなくてはならない」と述べています。そしてその方法は「自由な社会をいかにして実現するか」という問題と連動しているとも。非常に感動的なエンディングですが、もうちょっと踏み込んでほしかったですね。講演記録という形ですが、もう少しまとめて良かったんじゃないでしょうか。

先週のこの欄で、桐生操著「本当は恐ろしいグリム童話」(ミストセラーズ)を高校生の娘に紹介しましたが、茨城県の高野史緒さんは「読書」というのは美生活よりも何年も先に進んでいくべきだと、ちよんちよんという思想

## 談話室から

うていつか意見。高野さんは、『ヴァスリン』(中央公論社)などの近著がある作家です。「あの頃の内容のものは、むしろ、何もわからないまま味性

的な経験が始まる前に進んで読ませてあげるといいでしょう。私などは高校生の頃はすでに瀟灑龍彦など読んでいたものですが、大人として作家となった今、その経験は良いことだったとしみじみ思います。ただ、高野さんが心配してこの頃は、「創

作が主流である桐生さんの著書で『歴史』が学べると思ってる人が多い「こと」をうかがいます。確かに、高校生が読みたいものとの落差はいろいろあります。ほかの方のご意見もお待ちしています。

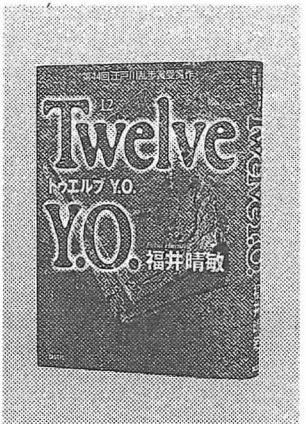
橋爪 機会を改めて議論したい問題ですね。本書は、加藤典洋氏の『敗戦後論』などと共に、戦後の転回点を面取りする書物として記憶される気がしますが、制度はだからといって変革も変化ともつかない変質を続けていますが、思想の面では、こうして自覚的な転回が企図された。「ポスト戦後」という時代が築かれることを望みたい。(10月26日の電子会議を編集しました)

# マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉(在ロンドン)

## 緑の会議室

コンピュータウイルス兵器で沖縄の在日米軍を攻撃する謎の日本人テロリスト・トゥエルフ。「十二歳の子供」として戦後五十年を生きてきた日本という国に、真の解放をもたらそうという戦いの行方は……。迫力ある戦闘アクションで話題の第44回江戸川乱歩賞受賞作ですが、はたしてこの作品は時代の空気をどう捉えているか。「緑の会議室」は大激論になりました。(講談社、1500円)



こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「カブキの日」。  
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。  
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

Tweive Y.O.

福井 晴敏著

橋爪 V著者はハリウッド映画を意識しているようで、ストーリーの展開や山場の組み上げがたが映画的です。もうひとつ感じたのは、マンガ(劇画)との共通性。人間の造形が過度に類型的で、大づかみで、そのぶん読者が感情移入して、想像力で補う形になっています。

## 戦闘アクション貫く 新世代の「嫌米」感覚

小林 V先人にならぬニュークナももの持っているのは立派。しかし、新人だから仕方がないのですが、やや若さが目立ちます。軍事的・技術的なりアリエーについても、首をひねるところが多かった。

島田荘司、錦織淳著  
「処刑の遺伝子」(南雲堂)のイメージ  
CGアート 横尾忠則

この想像力の広がり、ポスト冷戦的なのかと思えました。広瀬 Vこの小説を貫く「嫌米」気分は、単にアメリカに對

ている。アメリカという存在のもつ意味、受け止め方という点において、新しい世代らしい感覚が登場しはじめたという印象を持ちました。

小林 Vそういう時代の気分

を反映させ得たのは、著者のアンテナの鋭さでしょうが、同時に危なっかしさも感じます。日本人からのファンレターの多さにあきれたというマッカーサーの「日本人十二歳説」(トゥエルフの由来)ですが、「日本よ、大人になれ」という本書のテーマは掛け声倒れに思えました。

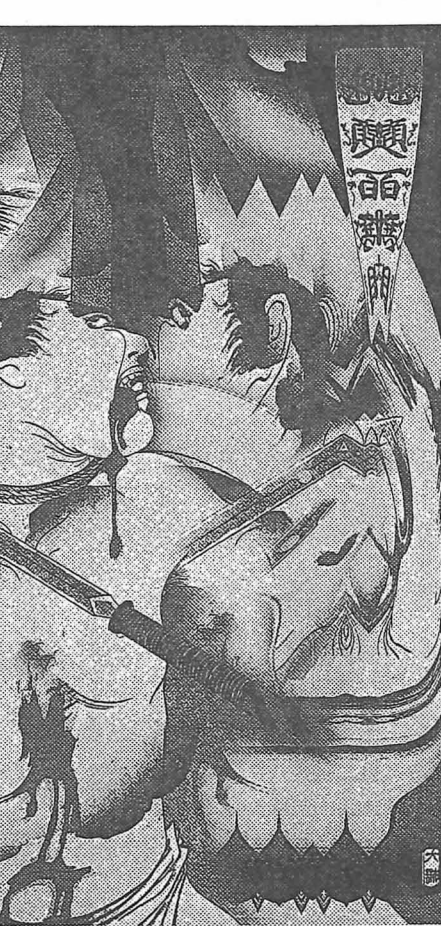
橋爪 Vこれまでの軍事アクション小説なら、米軍の対抗勢力は、ひと昔前ならソ連、あとは中国か北朝鮮、台湾海峡とい

いう想像力の広がり、ポスト冷戦的なのかと思えました。広瀬 Vこの小説を貫く「嫌米」気分は、単にアメリカに對

への共感として展開されます。しかもそれは、アメリカとの決別というよりは、アメリカ的なものを受容を当然の前提として

を反映させ得たのは、著者のアンテナの鋭さでしょうが、同時に危なっかしさも感じます。日本人からのファンレターの多さにあきれたというマッカーサーの「日本人十二歳説」(トゥエルフの由来)ですが、「日本よ、大人になれ」という本書のテーマは掛け声倒れに思えました。

広瀬 Vこの作品の主人公がトゥエルフではなく、彼に巻き込まれる挫折した中年自衛官にしたあたり、著者なりの幽止めも感じます。おそらくはテロという手法の限界に対する警告のメッセージも、ある程度込められているのでは。



橋爪 Vこの作品が描いているような気分が、今の若い人びとに広く受け入れられているとすると……。私自身、リベラルというスタンスを保ちつつも、国家・公共性の復興を考えている。そういう言葉を掲げる相手が、こうした気分を満たしているとなると、よほど注意しない、逆の反応を引き起こしかねないと感じました。



小林 Vそれにしても、乱歩賞の受賞者は筆力がある。純文学という貧血気味の文学ジャンルに属しているせい、ひたすら「まぶしく思えました。敵しい意見が相次ぎました。」「それだけ本気にさせる小説だったと言います。」

「日本では戦争のことは戦後五十一年の夏に盛り上がり、以来、あまり語られていないような気がします。十二月八日は日本がアメリカを相手に戦争を始めた日、日本ではでもなく、アメリカ人はいまだに「たわつて」いるのでは」と、埼玉県の

岡野晃次さんからの投書。「山本五十六戦死の真相は謎」と言われていますが、別宮善郎著「匪躬の節」(東洋出版)という小説はユニークで面白い

「私も電機メーカーに勤めています。過去の武将や軍人の戦略から経営を学ぶという方法は伝統的に有効だと思います。不景気は、おたおたするよりも、経済とか企業とか、文化とか、生き方とか、じっくり考えようとするのがいいかもしれません」

「私共電機メーカーに勤めています。過去の武将や軍人の戦略から経営を学ぶという方法は伝統的に有効だと思います。不景気は、おたおたするよりも、経済とか企業とか、文化とか、生き方とか、じっくり考えようとするのがいいかもしれません」

11月16日の電子会議を編集しました



# マルチ読書

小林恭二 橋爪大三郎 広瀬克哉

## 緑の会議室

西鶴が描いた八百屋お七、中里介山の「大菩薩峠」、そして村上春樹の「ノルウェイの森」に共通するもの——放火への欲望、放火への陶酔。多田道太郎さんの異色評論は、古今の日本文学を「火」という象徴性から分析し、意外な視点を読者に提供してくれます。その自在で肩力が抜けた話芸のゆえに、「緑の会議室」は、やや戸惑いつつも拍手を惜しみませんでした。(講談社、2500円)



多田 道太郎著

こばやし・きょうじ 作家。57年生まれ。作品に「カブキの日」。  
はしづめ・だいさぶろう 東工大教授、社会学者。48年生まれ。  
ひろせ・かつや 法政大法学部教授。58年生まれ。専攻は行政学。

## 変身放火論

橋爪 V系統的でカチツとした論理構築を期待して読みましたが、ふわっとして、つかみどころのない軽みで、話題がぐるぐるめぐって自然に「火」のテーマに変換していく。こういう文体が好きなのはたまらないです。なと思えました。

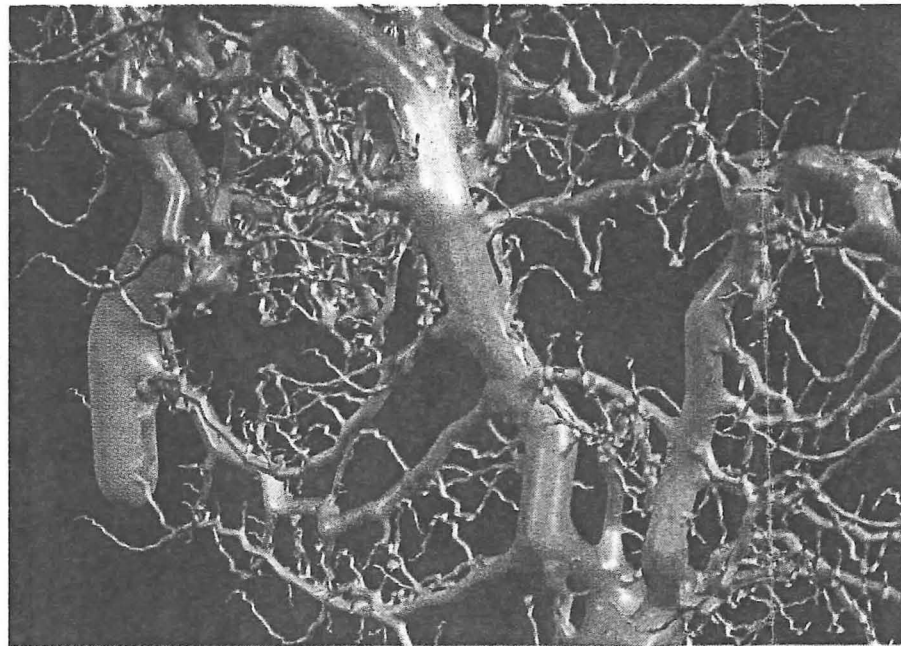
広瀬 Vとりとめがないよう

小林 V最初は「軽い」と思

イルムガルト・ルヒト著

「ツリー・カレンダー」(国土社のイメージ

CGアート・河口洋一郎



読んで全体に仕掛けがあり、「八百屋お七」で始まった本が、ロククグループ「トキキングヘツズ」の歌詞「ストップ・メーキング・センス(意味づけをしなさんな)」で閉じられるという作りには、読者として十分に楽しませてもらいました。

面々の文体で迫ってゆけば、必ずどこかで水漏れしてしまうでしょう。

橋爪 V文体の無重力的自由については、シュールレアリスムの自由連想法を思い出しました。総体としては拡散しているけれど、変身放火という核を持っているので、リズム(地

## 西鶴が村上龍なら 近松は村上春樹?

橋爪 Vあながきで筆者は、**「蛙のふし」**に「はらばら」のふしとあながきで「足どり」で『変身放火論』という蝸蝸もふしとみ、死んだふりをしている——つもりなんです。と書いていますが、年齢を重ねた自分の文体を「死んだふり」と客観化しているんですね。なかなかの覚悟です。

小林 V近松について著者の発見の最たるものは、「涙の隣に笑いがある」でしょう。実際、「曾根崎心中」はあれだけ正統な悲劇なのに、客席から笑い声が絶えないんです。この柔らかな文体は、やはり二、三章の西鶴論、近松論を美のあるものにするために選択されたような気がします。△恋の炎に狂喜するお七の表情は(中略)乳幼児ととんと姿は似ていない。見る著者は、△世間から見れば無動機とせんの放火をした娘をあっけらかんの「ケロリンお七」なぞと呼ぶ。これを真

下巻のうちに、いったん散らばると見えて、またまとまとという複雑系な動きをしている。しかし同時に、無邪気な老人のおしゃべりのような、つきあいたい感じが感じられます。

広瀬 Vほぼ同時代の作品である第一章「八百屋お七」と第二章「曾根崎心中」の世界に対して、ずつと時代の下った第五

うより信仰の書に近いものですね。この二冊は日本と西洋の両極端のようであって、妙に重なる部分のある本だと思えます。

あつと二つ間の一年で、たが、来年の紙面は一月十一日付から再開します。みなさんもよいお年をお過ごし下さい。

## 談話室から

「『私一人の書棚に入れておくにはもったいない』とつねづね感じていた二冊の文庫本を紹介いたします」と神奈川県の大竹美由紀さん。

「一冊は吉野せい著『演をたらしめた神』(文春文庫)。自然の中の生活、母親の心情、子供

ない『生者の心』(そのものが研ぎすまされた刃物のように光り、私をほっとさせました。も

う二冊はラゲルレーヴ『キリスト伝説集』(岩波文庫)。その中の『聖なる夜』は、イサの夜にひとり子供に読み聞かせてあげたいお話です。そして、『わが主とペトロ聖書』は悲しみと喜びの両方を同時に突きつけてくる作品です。文学とい

## おしるし

今回は一月二日「青の会議室」(柏木ハルコ著「小学館」)。

(12月7日の電子会議を編集しました)